

に回答した。その結果、ロシアの軍事・財政顧問は韓国より引揚げた(三月二十三日)。

ロシア勢力は韓国から撤退した。だがどこまでも抜け目のないこの国は、直ちに南下政策の矛先を満洲に向けた。ロシアが清国から旅順・大連を租借したのは、韓国から軍事・財政顧問を引揚げた僅か四日後の三月二十七日であった。

旅順・大連は云ふ迄もなく、ロシア等が三国干渉で日本を圧迫し、清国に返還させた遼東半島の軍事・通商上の要衝だ。日本に返させたものを今度は自分で奪ったロシアとしては、何とかしてこの筋の通らぬ租借を日本に認めさせる必要に迫られた。そこで日本を宥和する目的で結ばれたのが、同年四月の「西(徳二郎外相)・ローゼン(駐日公使)協定」である。

右協定は、日露両国とも韓国内政干渉をせぬこと、韓国の要請で軍事・財政顧問を任命する時に予め協議すること、ロシアは韓国に於ける日本の商工業上の權益を認めること等を骨子としており、旅大租借を日本に黙認させんとして、韓国に於ける日本の地位をある程度承認したものであった。

しかし、駐英公使・加藤高明が評した通り「内政不干渉の約束は単に一抹の幻想に過ぎない」ことがやがて明らかになる。即ちロシアはこの協定で韓国への侵出を放棄したのでは決してなく、シベリア鉄道と東支鉄道が完成し、極東侵略の準備が整った暁には再び朝鮮半島へその爪牙を伸ばさんと時機を窺つてゐたのである。

第二節 三国干渉の高いツケ

露清密約

日露戦争に始り満洲事変へと続いてゆく極東の禍乱の第一原因は清国の愚策にあつた。それについて説明しておかう。三国干渉に頼つて日本から遼東半島を奪還した清は、却つて莫大な報酬を支払ふ結果となつた。報酬の要求は先づロシアから来た。

日清戦争の翌年（一八九六年）五月、新帝ニコライ二世の戴冠式にロシアは李鴻章を遣露大使としてモスコウを訪問せしめ、優遇の限りを尽した。その折、蔵相ウキッテは李に「日本は必ず、遼東半島奪還を策すに違ひないので、この機会に攻守同盟を結びたい」と提案し、その結果、翌六月ロバノフ外相と李鴻章の間に結ばれたのが、露清密約（李・ロバノフ密約）である。

右密約は、日本のロシア、支那または朝鮮に対する侵略に対して相互援助すること、露軍の輸送を容易にするため、清国は満洲を横断してウラヂオストックに向ふ鉄道の建設に同意すること、対日戦争の場合、ロシアは右鉄道を軍用に自由使用できること等を骨子とするものであつた。そしてこの鉄道建設のため露清銀行が創設され、東支（東清）鉄道会社が設立された。

（註）我国はこの露清密約の存在を一九二三年のワシントン会議で初めて知つたのであつた。第六章第二節参照。

東支鉄道会社は清国内に設置されるにも拘らず、その土地と収入は一切免税とされ、また同社はその所有地に對

して絶対的かつ排他的な行政権を有するものとされた。ここにロシアの清に對する「鉄道と銀行による征服」が開されたのである。東支鉄道は明治三十一年（一八九八年）八月に着工され、一八九一年から建設中であつたシベリア鉄道と連絡してザバイカルとウラヂオストックを最短距離で結ぶことになつた。一九〇一年十月に完成、一九〇三年（明治三十六年）七月に営業を開始したが、この東支鉄道こそロシアの対滿侵略の経路となり、日露戦争を導く重要な媒体の役目を演ずることになつた。

清国の「生体解剖」

ロシアがこのやうにして三国干渉の報酬を得ると、他の列国もこれに倣つた。まづドイツは一八九七年十一月、山東省で二名のドイツ人宣教師が殺害されるや、軍艦で膠州湾を占領、翌年、ロシアと内応して膠州湾の九十九カ年租借権と山東省の鉄道敷設権と鉱山採掘権を得た。

ドイツの膠州湾占領を見たロシアはすかさず艦隊を派して遼東半島の旅順と大連湾を占領した（一八九七年二月）。のみならず「他国の侵略から清国を保護する」との口実で、旅順・大連とその後背地の長期租借権を要求した。「他国」とは日本を指す。清はロシアに屈し、一八九八年三月、ロシアは旅順・大連二十五年間の租借権（その後も交渉で租借期間を延長できることになつてゐた）と、東支鉄道を旅大まで延長する権利を獲得、宿望の不凍港を入手した。龍を得て蜀を望むロシアは、その後間もなく遼東半島全域を租借区域として獲得した。三年前、「日本の遼東半島領有は極東永遠の平和に有害」との辞柄を設けて遼東半島を日本から清に返還させたロシアが、今やその干渉の報酬として同じ遼東半島を己れの腹中に収めたのだ。我国は切齒扼腕しながらも、ロシアのこの横暴を傍観する他なかつた。

フランスはロシアと提携して清を圧迫、一八九八年十一月、南支の広州湾九十九カ年租借権を得た。それに対抗

して英国は同年六月、九竜半島九十九カ年租借権（今なほ継続中）と、更にロシアの旅大租借に對抗して七月には威海衛租借権を獲得した。

この他、同じ一八九八年に英国は揚子江沿岸、フランスは海南島と広西・雲南両省、我国は台湾対岸の福建省についてそれぞれ不割譲を清に約させ、自己の勢力範囲とした。列国のこのすさまじい侵奪を、ある米国の歴史家は清国の「生体解剖」と評した（Thomas A. Bailey, A Diplomatic History of the American People）。

清国が日本を撃肘（せいじょう）するためロシア等に援助を求めた三国干渉は、清国自身に大きな代価を払はせ、その上、日本を含む東亜全域を大きな禍乱に巻き込む結果となった。中国の著名な史家・王芸生（前出）はかう論ずる。

「三国干渉は処置拙劣を極めたため、正に分割の禍を招来せんとし、しかもその後には於ける世界幾多の悲劇はここに胚胎した。蓋し、清廷諸官は、三国の一言で遼東が返還されたのを見て、露国に対する迷信益々深まり、もしその援助あらば日本は恐るるに足らざるのみならず、他の列国もまた風を望んで退却すべしと考へた。かくて李鴻章、露国と密約を結ぶに及んで満洲問題の禍根は植付けられ、更に列強の激烈な角逐を惹起し、北清事変、日露戦争より欧州大戦に至るまで、すべてこれより一連の線を引く悲劇を作るに至つた。そして元来多事を畏れた清国は、却つてこれより世界混乱の中に巻き込まれ、翻弄せられて帰する所を知らない有様に立ち至つた」（『日支外交六十年史』第三卷）

三国干渉での清の以夷制夷、とくにロシアの援助に頼つた浅慮を以後のアジア禍乱の第一原因なりと論ずるもので、近代極東紛争史の背景と本質を見きよめた卓抜な史論と云へよう。満洲事変を生んだ土壌と種子は、遠く三国干渉の時期に、中国自身が耕し、中国自身が蒔いたものだつた。

第二節 米国の太平洋進出と門戸開放政策

アメリカの「新しき国境線」

すでに述べたやうに、一八九八年（明治三十一年）といふ年は、列強が貪欲に清国を侵奪した年であつた。米国のこの侵奪には加はらなかつたが、この年は米国にとつても「劇的な転換期」であつたと云はれてゐる。何故なら、この年に米国は米西（スペイン）戦争でキューバを保護国とし、プエルト・リコを獲得してカリブ海支配の基礎を固めたのみならず、遠く西太平洋に進出して Guam 島を獲得、更にはフィリピンまでも領有するに至つたからである。その上、米西戦争はハワイ併合の氣運を高め、一八九八年八月、 Honolulu で米布併合式が挙行され、ハワイ政庁に星条旗が翻ることになつた。

斯くして、一八五〇年カリフォルニア沿岸を西の国境とした米国は、一八九八年には一挙に西太平洋に勢力範囲を拡大し、ハワイ、Guam、フィリピンを結ぶ線を以て「アジアに於ける新国境」を設定したのであり、極東に対する米国の関心と介入はここに新しい時期を画することになつた。

ハワイ保護化への決意

大東亜戦争が、我が海軍の真珠湾攻撃を以て開始されたことは周知の事実だ。だがこれには、ハワイをめぐる日